国語（一まいめ）

＊問題作成のために、原文を一部変更したところがあります。

1 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

ゆみ子ちゃんには、一つ問題があります。

なぜだか、すぐに、いろいろなことを忘れてしまうのです。

手を洗いにゆくと、電気をけし忘れます。

寝巻をぬぐと、たたむのを忘れるので、床に落ちた寝巻は、まるでゆみ子ちゃんのぬけがらです。

本を読んでいる時に、お友達が遊びに来たりすると、たいへん。本のことはすっかり忘れて飛んでゆくので、かくれんぼが大好きなゆみ子ちゃんの本は、クッションのかげにもぐりこんで、いなくなってしまいます。

そして、もっとこまったことには、今月は三かいも宿題を忘れました。

一どめ、お母さんはため息をつくと、

「こんどから気をつけるのですよ」と、静かに言いました。

二どめの時は、声が一オクターブぐらいあがって、

「このあいだも忘れて、気をつけますと、お約束したばかりでしょー　ゆみ子ちゃんが日ごろから、①いろいろなことをきちんとやりとげるように努力しないからよー　ごらんなさい、先生からのお手紙もあるわ」

お母さんは（　A　）しながら、ペンをとりにゆきました。先生におわびの手紙を書くためです。

ゆみ子ちゃんには、お母さんの目が三角になり、髪の毛も逆だちしたように見えました。するとなんだか、背中がちょっと寒くなりました。

ペンをとってきたお母さんは、連絡帳に、『ゆみ子の不注意を、おわびいたします。今後気をつけるように、よく言いきかせておきました』と書きました。そして「さあ、ゆみ子ちゃんも、ここにおわびの言葉を書きなさい」

ゆみ子ちゃんはどきどきしながら、口を一文字にむすんで、いっしょうけんめいに書きました。

『先生、ごめんなさい。こんどから、宿題を、けっして忘れないようにきをつけます』

それから何日かたったあと、学校から帰ってきたゆみ子ちゃんは、宿題のプリントを、教室のつくえの中に忘れてきたことに気がつきました。

でもお母さんに言うと、またきっとお母さんの目が三角になり、髪の毛も逆だちして、いつものお母さんのようではなくなってしまいます。

それを思うと、ゆみ子ちゃんの背中も手も足も、氷にさわったように冷たくなってしまいました。

それでお母さんに、本当のことを言いそびれてしまいました。

お母さんは、「ゆみ子ちゃん、元気がないわねえ、つかれたのかしら……今日は早く、おやすみなさいね」と、心配そうに言いました。

②ゆみ子ちゃんの胸は、ズキンと痛みました。

翌日、学校から帰ってきたゆみ子ちゃんは、うなだれて、お母さんに連絡帳を見せました。

そこには、「ゆみ子ちゃんは、また宿題を忘れました」と書かれています。

お母さんの怒った顔を見ると、病気になりそうなので、ゆみ子ちゃんは涙をこらえながら、しっかりと目をとじていました。

お母さんは、しばらくだまっていました。

ゆみ子ちゃんには、胸が（　B　）する音だけが、とても長い時間が過ぎたようでした。

両方の耳のそばで踊っているように思えました。

国　語　（二まいめ）

　すると思いがけないことに、とつぜんお母さんが両手をポーンとたたくと、とても明るい声でさけびました。

「わかったわ！」

　ゆみ子ちゃんがびっくりして目をあけると、お母さんが（　C　）しながら、ゆみ子ちゃんを見ています。

「……なにが、わかったの、お母さん？」

「やっとわかったわ、ゆみ子ちゃんの、もの忘れ。これは、③ぽけぽけ虫のせいよ！」

「ぽけぽけ、むし？」

「そう、ぽけぽけ虫、よ」

「ぽけぽけむしって、なあに？」

「お母さんが生まれた土地ではね、ぼんやりすることを、ぽけぇーっとするって言うのよ。それでね、このぽけぽけ虫はいつも、それはぽけぇーっとしているから、こんな名前になったのよ。もう、それはぼんやりやさんで、自分のお家も忘れてしまって、どこに帰ればいいのやら。だいたい迷い子になっては、道ばたの木の枝かなんかにぶら下がっていて、下を通りかかるだれかの頭にとびのると、そのままくっついてきちゃうのよ」

「わるい子が……好きなの？……」と、ゆみ子ちゃんはちょっと心配になってたずねました。

「いいえ、わるい子でもいい子でも、大人でも子どもでも、犬でも猫でも、頭のあるものなら何にでもとびつくのよ」

「でもどうして、頭が好きなの？　そして、頭の上でなにをするの？」

　お母さんは目を（　D　）と輝かせました。

「じつはね、このぽけぽけ虫の大好物は、こころとか、考えとか、記憶なの。ゆみ子ちゃんも忘れないでおこうと考えることや、どうしても覚えておきたいと思うことも？」

「宿題を忘れたくないと思うことも？」

「そうよ」とお母さんはうなずきました。

「お父さんやお母さんにするお約束も？」

「そうよ」とまたお母さんはうなずきました。

　ゆみ子ちゃんはちょっとおどろいて、またたずねました。

「そんなもの、食べられるの？」

「そうよ、だって蜂は蜜をすうし、お魚はプランクトンを食べるし、鳥は昆虫を食べるでしょう？　ぽけぽけ虫は考えや記憶を食べるのよ。食べて食べてすぎて、まるまる太って、もう動くのもいやになるんだと思うわ。だから自分のうちにも帰らずに、そのままとびついた頭に住みついてしまうのね。なにしろ、ものすごい食いしん坊ときているから、放っておくと朝から晩まで食べ続けるらしいわよ。食べられちゃった考えや、思い出や、記憶は、頭の中から消えてしまうわね。それで、いろいろなことを忘れてしまうのよ。

　お母さんが思うには、悪いのはゆみ子ちゃんではないわ。このぽけぽけ虫の食欲がいけないのよ。だってゆみ子ちゃんは、お母さんのとってもだいじな、とっておきのいい子ですもの。ゆみ子ちゃんが、いつも言われている大切なことを忘れて、気持ちのいいはずはないものね。がんばって、ぽけぽけ虫が大きくなりすぎないようにしましょうね」

「お母さん、ぽけぽけ虫を、おい出してしまうことはできないの？」

「そうねえ、むずかしいでしょうね。④ただ大きくならないようにするしか、方法はないわけね。大きくなると、食べる量もふえてくるでしょう……、本当のことを言うとね」

　ここでお母さんは、ないしょ話をするように、身をかがめて、声をひそめました。

国　語　（三まいめ）

「お母さんのこの頭にも、お父さんの頭にも、ぽけぽけ虫は、のっかっているのよ。ほら、ときどきお父さんが、あっ忘れてたって、おでこをたたいて飛んでったりするでしょう？」

ゆみ子ちゃんは、ちょっとほっとしてたずねました。

「ぽけぽけ虫って、どんなかたちで、どんなかおをしているの？」

お母さんは腕をくんで、フームと言いながら、「考えや心で思うことと同じで、目には見えないのよ。残念ながら、お母さんも見たことがないの」

その夜、ベッドの中で、ゆみ子ちゃんはあれこれと、ぽけぽけ虫の姿かたちを想像してみました。

ぼんやりした顔をして、ぽけーぽけーと首をふりながら、みんなの考えや記憶を、ハートや星の型のクッキーみたいにこんがり焼いて、ムシャムシャ食べるのかしら？　いいえ、もっとおかしな顔をした、仲間はずれにされたおばけのようなのかもしれません。それとも、いつかお父さんがつれていってくださった博物館にちんれつされていた、背中にとげとげのあるカイジュウに似ているのかもしれません。あるいは耳とひげをピーンと立てた、縞もようの猫のユーフィにそっくりかもしれません。なぜってユーフィはそれはかわいい仔猫なのですが、うっかりしたり、ぼんやりしたり、同じ失敗をくりかえすことにかけてはゆみ子ちゃん以上、まさに天才的なのです。

かごを見ると、どんな高いところにおいてあっても飛びこんでゆくので、かごといっしょにころげ落ちてしまいます。ゆみ子ちゃんの小さな亀たちにいたずらをしては、もう数えきれないほどオシリをたたかれています。父さんが何度言いきかせても、お父さんの革のスリッパで爪をとぎます。台所にかけてある、お母さんのエプロンは、ユーフィがポケットにぶら下がってはやぶいてしまうので、今のは三枚めです。

お母さんは、「もうここに掛けるのはやめるわ」と言いながら、ついまた掛けてしまうので、やはりお母さんの頭の上にも、ぽけぽけ虫はいるのでしょう。

それにしても、本当にこまったものです。

お母さんは、「ぽけぽけ虫が大きくなりすぎないようにしましょうね」とおっしゃったけれど、どんな方法があるのでしょう？

夕食の時に、お父さんにもきいてみましたが、『対策』はひとつしかない、のだそうです。

一どとびのられたら、どうしてもおい出すことのできないぽけぽけ虫。ゆみ子ちゃんの考えや記憶を、全部たいらげられないように、自分でよく気をつけること。お父さんの言葉で言えば――「自分で自分をコントロールする」しか方法はないのだそうです。

これは本当にたいへんなことになりました。なんという迷惑な虫が頭にのっかってしまったことでしょう。

（ふみ子・デイヴィス『ぽけぽけむし』より）

（注）　寝巻……パジャマなど寝るときに着る服。
口を一文字にむすんで……口を閉じてがんばっているさま。
言いそびれて……言いたいことを言い出せないで終わること。
うなだれて……心配ごとやはずかしさのために首を前にたれること。
プランクトン……水中にいる目に見えないくらい小さな生物のこと。
ちんれつ……人々に見せるために物を並べて置くこと。
対策……そのことがらに対する手段や方法。
たいらげ……出された飲食物を全部食べてしまうこと。

国語（四まいめ）

（1）1の文章中の（A）～（D）に入ることばの組み合わせとしてよいと思われるものを、次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア　A　ニコニコ　B　ドキドキ　C　キラキラ　D　プンプン
イ　A　プンプン　B　ドキドキ　C　ニコニコ　D　キラキラ
ウ　A　プンプン　B　ニコニコ　C　キラキラ　D　ドキドキ
エ　A　ニコニコ　B　プンプン　C　ドキドキ　D　キラキラ

（2）1の文章中に――線部①「いろいろなこと」とありますが、本文中に書かれている内容としてふさわしくないものを次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア　手を洗いにいって電気をけすこと　イ　寝巻をぬいだらたたむこと
ウ　かくれんぼを最後までやること　エ　宿題を忘れずにやること

（3）1の文章中に――線部②「ゆみ子ちゃんの胸は、ズキンと痛みました」とありますが、その理由としてよいものを、次のア～エからすべて選び、記号で答えなさい。

ア　お母さんに本当のことを言いそびれたから。
イ　元気がないことをお母さんが心配してくれたから。
ウ　風邪をひいて氷のように冷たくなってしまったから。
エ　先生に宿題を忘れたことで怒られたから。

（4）1の文章中に――線部③「ぽけぽけ虫」とありますが、お母さんが考える、ぽけぽけ虫の特ちょうとしてよいものを、次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア　いい子よりもわるい子の頭が好き　イ　いい子になると頭から出ていく
ウ　人間の頭にしかとびつかない　エ　考えや記憶を食べすぎて動くのがいやになる

（5）1の文章中に――線部④「ただ大きくならないようにするしか、方法はないわけね」とありますが、その方法が書かれているところを二カ所、本文中から十字以上十五字以内でそれぞれぬき出して答えなさい。

（6）1の文章中に――線部⑤「縞もようの猫のユーフィにそっくりかもしれません」とありますが、ゆみ子ちゃんは、何とユーフィがそっくりだと思っていますか。よいものを、次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア　ぽけぽけ虫　イ　お母さん　ウ　カイジュウ　エ　ゆみ子ちゃん

2　次の文章を読んであとの問いに答えなさい。

植物は、どうして立ち上がらなければならないのだろうか。

たしかに、植物は上へと伸びる。植物が上へと伸びるのには、それなりの理由がある。

もっとも大きな理由は、太陽の光を浴びるためである。……（ア）

植物が生きていくためには光が必要である。隣の植物よりも、少しでも高く伸びなければ、ほかの植物の葉の陰に甘んじて光を失うことになる。だから、植物は縦に伸びるのである。

しかし、よく踏まれる場所では、縦に伸びる植物は生きていくことができない。少しばかり茎を伸ばしても、すぐに踏まれてしまうからだ。……（イ）

国語（五まいめ）

「踏まれても、立ち上がらなければならない」というのは、人間の勝手な思い込みに過ぎないことがわかる。

雑草にとっては、「踏まれても立ち上がらない」ことこそが、成功哲学なのである。……（ウ）

しかし、立ち上がらなくてよいとは言っても、踏まれっぱなしで枯れてしまうようでは困る。……（エ）

踏まれたら、立ち上がる必要はないが、しかし、どんなに踏まれても、しおれたり、枯れたりすることがなく、しぶとく生き抜くのである。……（オ）

植物が縦に伸びるもう一つの理由には、花を咲かせるということがある。

植物は、ハチやアブなどの昆虫に花粉を運んでもらって、種子を作る。花が高い位置にある方が、ハチやアブに見つけてもらいやすい。地べたに咲いていたのでは、ハチやアブに花粉を運んでもらえないのではないだろうか。

植物は、ハチやアブに花粉を運んでもらうことで、ほかの個体と交配してよい子孫を残すことができる。

ところが、雑草の中には、次善の策として、ハチやアブが花粉を運んでくれなくても種子を残す「自殖性」という仕組みを発達させているものが多い。

そのため、たとえ昆虫がやってこなくても、種子を作ることができるのである。

花粉を運ぶことをあきらめて、自分の花粉で自殖する。これは一つの方策である。②

一方、コニシキソウという雑草は、花粉を運ぶための別の方法を考えた。

コニシキソウは、歩道のブロックの隙間などに生える、よく踏まれている雑草である。

コニシキソウは、地面にぴったりと葉をつけて、横へ横へと伸びていく。葉は平らで、地面と水平についている。まさに最初から踏まれることを想定した体のつくりをしているのである。

コニシキソウは、ハチやアブに花粉を運ばせることはあきらめた。コニシキソウの花粉を運ぶ役は、アリにまかせたのである。

アリは地べたを歩き回っている。そして、コニシキソウの蜜をもらいながら、茎を伝って花から花へと花粉を運んでいくのである。

「花粉を運ぶのは、ハチやアブとは限らない」

このパラダイムの転換は、コニシキソウの花に大きな変革をもたらした。

ハチやアブを呼び寄せるための美しい花びらや、甘いにおいを用意しなければならない。ところがアリは、わずかな蜜のにおいがあれば、たちどころに寄ってくるから、コニシキソウは無駄に花びらを飾る必要がなくなったのである。もちろん、蜜もたくさんはいらないし、花のサイズも小さくていい。

植物の生育の測り方に③「草高」と「草丈」というよく似た二つの言葉がある。

「草高」は草の高さである。植物の根元から、先端までの高さをいう。つまり地上に出ている高さである。

これに対して、「草丈」は草の丈である。草丈は、植物の根元から、先端までの長さをいう。

「なんだ、同じじゃないか」と思うかもしれない。

たしかに、まっすぐ縦に伸びた植物にとっては、草高と草丈は全く同じである。

しかし、踏まれて生きる雑草たちにとって、草高と草丈が意味するところは、大きく違う。

踏まれやすい場所で、横に伸びていく雑草は、草丈をどんなに伸ばしても、草高はゼロなのである。

人間は、植物の成長を高さで評価しがちである。

アサガオが二階まで伸びたといって喜ぶし、草がひざまで伸びてきたから、そろそろ草取りでもするかと感じる。

国　語　（六まいめ）

だから、「踏まれても立ち上がれ」と縦に伸びることを期待するのである。

□、踏まれて生きる雑草にとっては、大事なのは草高ではなく、草丈である。だから、「踏まれたら立ち上がらない」のである。

（稲垣栄洋『都会の雑草、発見と楽しみ方』より）

（注）甘んじる……与えられたものをしかたがないと思って受ける。
成功哲学……目的を達成するために必要な考え方。
交配……受粉すること。
次善の策……二番目によい手立て。
自殖性……自分で受粉する性質。
方策……手立て。
パラダイムの転換……ものの見方や考え方の方向を変えること。
変革……変え改めること。

（1）2の文章中の□の中に入れるとよいと思われる言葉を、次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア　では　　イ　しかし　　ウ　すると　　エ　それとも

（2）次の文章は2の本文からぬき出したものです。この文章は、本文中の（ア）～（オ）のどこに入りますか。よいと思われるものを一つ選び、記号で答えなさい。

その一方で、よく踏まれる場所は、背の高い植物によって覆われ日陰になってしまうことはない。歩道やグラウンドなど、よく踏まれる場所では、植物は縦に伸びなくても、太陽の光をいっぱいに浴びることができるのである。

（3）2の文章中に――線部①「植物が上へと伸びるのには、それなりの理由がある」とありますが、次のア～エの中で、その「理由」にあてはまらないものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア　他の植物の葉の陰にかくれないため。
イ　太陽の光をたくさん浴びるため。
ウ　踏まれて立ち上がりやすくするため。
エ　高い位置に花を咲かせるため。

（4）2の文章中に――線部②「別の方法」とありますが、その方法について述べられている二十字以上（句読点十字以内の一文をさがし、初めと終わりの七字をそれぞれ答えなさい。（句読点と記号も一字と数えます。）

（5）2の文章中に――線部③「「草高（くさたか）」と「草丈（くさたけ）」というよく似た二つの言葉がある」とありますが、次のア～エの中で、「草高」や「草丈」についての説明としてよいと思われるものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア　「草丈」は、植物の根元から先端までの高さ、つまり地上に出ている高さをいう。
イ　「草高」は、植物の根元から、先端までの長さをいう。
ウ　踏まれて生きる雑草たちにとって、草高と草丈が意味するところは、同じである。
エ　踏まれやすい所で、横に伸びていく雑草は、草丈を伸ばしても、草高はゼロである。

国語（七まいめ）

3 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

子供の頃は、しもやけがひどくて手袋が必需品だった。小学校に上がるまでは、母の手編みのミトンをはめていた。手の甲のところに雪の結晶の模様が編み込まれた紺色のミトンで、右手と左手が紐状の鎖編みでつながっていた。

少し大きくなるにつれ、親指とその他の指、二つにしか分かれていない単純な形と、片方だけ失くしたりしないための長々とした鎖編みが、子供っぽく感じられるようになった。

だから五本指の、紐でつながっていない手袋を初めてはめた時はうれしかった。これぞ正真正銘の手袋だ、という気がした。しかしおっちょこちょいの私は、案の定、幾度となく片方を失くした。大人になってしもやけができなくなると、手袋との縁もほとんど切れてしまった。上品で綺麗な色の革製があれば、と思ってデパートを探してもなかなかいいものに出会えず、結局、①コートのポケットに手を突っ込んで誤魔化していた。

ところが先日、フィレンツェを旅している時、②手袋専門店を見つけた。小さな店ながら、三方の壁一面の棚に隙間なく手袋が詰り、カウンターの向こうには、腰回りのがっしりした、ちょっと怖そうな雰囲気の女性店主が立っている。観光客であふれる通りのにぎわいとは無縁を装うように、店内は薄暗く、しんとしている。

不意に、大人になった自分に相応しい手袋を長年探していたことを思い出し、勇気を出して中へ入ってみた。「いらっしゃいませ」の言葉はなく、③店主はただ目配せするばかりであった。カウンターの真ん中に、丸い小さなクッションが置いてある。ああ、そうか、この上に手を載せるんだな、と私は承知する。

思わず手を載せてみないではいられないクッションなのだ。コロンとして可愛らしく、たっぷりとした厚みがあり、古風な花柄で彩られている。今までいったい何人の人がそこへ手を置いたのか、真ん中に小さな窪みができているように見えるが、④それも丸い形の中に綺麗に馴染んでいる。

そろそろと私はその窪みに手を伸ばす。店主は相変わらず愛想なく、むっつりしている。

「新美南吉の童話『手ぶくろを買いに』の子狐も、こんな気持だったのだろうか」

ふと私は思った。せっかく片方の手を人間に変えてもらい、間違った方を出してはいけませんよとお母さんに言い含められていたのに、お店から漏れてくる光に面食らって、子狐は狐の手を差し出してしまうのだ。

「このお手々にちょうどいい手袋下さい」

失敗をしでかしたのに、子狐は少しも慌てず、人間に向かって礼儀正しくセッすることができた。私が店主に向かって言いたいのも、まさに子狐のこの台詞だった。

「お願いです。どうか私の手にぴったりの手袋を下さい」

しかしイタリア語が喋れない私は、ただ黙ったままでいるしかない。

「エイト」

その時、クッションの上の手を見下ろしていた店主が、突然、有無を言わせない、威厳に満ちた口振りで宣言する。そうして棚の一段から、二十種類くらいの手袋を取り出し、カウンターの上にどさっと置いた。

私の手の大きさは、どうも8号らしい。手袋は実にさまざまな種類がある。子牛、羊、スエード、手縫い、機械縫い、黒、グリーン、オレンジ……。試してみたい品を指差すと、すかさず店主がモクセイの細長い道具で、五本の指をぐいぐいと開き、手にはめてくれる。

あれもこれも、とあまりやり過ぎると店主のご機嫌を損ねるかもしれない。最初はそう思い、恐る恐るといった感じだったが、彼女は全く気にする様子はない。

途中、少し大きいような気がして、7・5号の棚を指差してみたのだが、店主は首を振り、「エイト」を繰り返す。きっと何十年も客の手ばかりを見てきたに違いない店主が、そこまで言うのなら間違い

国語（八まいめ）

なかろうと思い、やはり8号の中から探すことにする。
無事、手袋を買えた子狐は、「母ちゃん、人間ってちっとも恐かないや」と報告する。それをはめて暖かくなった両手をパンパンと得意げに叩いてみせる。
結局、私は赤色の手袋を買った。身につけるもので赤色などかつて買ったことがないのに、なぜかその色を選んでいた。それをはめた時、店主が大きくうなずいたからかもしれない。
「お前には赤が一番似合う」
エイト、と同じ口調で、そう断言しているような気がした。
「イタリア人店主は、ちっとも怖くなかった」
手袋の入った小さな袋を提げ、一人ヴェッキオ橋を渡りながら、子狐の真似をして私はつぶやいてみた。

（小川 洋子『とにかく散歩いたしましょう』「フィレンツェの赤い手袋」より）

（注）必需品……どうしても必要な品物のこと。
ミトン……親指を別にして、残りの四本の指が一つに入る形の手袋のこと。
鎖編み……編み物の編み方の一種。
正真正銘……うそのないことを強調する言い方。
案の定……思った通り、ということ。
フィレンツェ……イタリアにある都市の名前。
無縁を装う……関係ないふりをする、ということ。
愛想……人に好かれるような態度のこと。
『手ぶくろを買いに』……子狐が手ぶくろを買うために人間の住む町に行くお話。子狐は母狐に、片手だけ人間の手に変えてもらい、狐と見やぶられないようにと注意されたが、お店の窓からうっかり狐の手の方を出してしまう。しかし、何事もなく手ぶくろを買うことができ、子狐はまた山に帰っていく。
面食らって……突然の出来事に驚きあわてること。
有無を言わせない……相手の反応がどうでも関係ないというような強い態度を表す表現。
威厳に満ちた口振り……人を自然にきちんとさせるような雰囲気のある口調のこと。
子牛・羊・スエード……手袋の革の材質。

（1）3の文章中に――線部①「結局、コートのポケットに手を突っ込んで誤魔化していた」とありますが、筆者が「誤魔化していた」のはどのようなことですか。次のア～エの中からよいと思われるものを一つ選び、記号で答えなさい。
ア　手にひどいしもやけができてしまったこと。
イ　子供っぽい手袋を身につけていること。
ウ　幾度となく手袋の片方を失くしてきたこと。
エ　いい手袋を身につけたいと思っていること。

（2）3の文章中に――線部②「手袋専門店」とありますが、この店の説明としてまちがっているものを次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。
ア　筆者がフィレンツェを旅して見つけた小さな店。
イ　三方の壁一面の棚に隙間なく手袋が詰っている。
ウ　観光客であふれる、薄暗くてもにぎやかな店内。
エ　カウンターに、丸い小さなクッションがある。

国　語　（九まいめ）

（3）3の文章中に――線部③「店主はただ目配せするばかりであった」とありますが、筆者は店主の目の合図をどういうことだと思いましたか。次のア～エの中からよいと思われるものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア　早く外から店内に入ってこい、ということ。
イ　自分に相応しい手袋を探せ、ということ。
ウ　自分の手の大きさを言うように、ということ。
エ　クッションの上に手を載せろ、ということ。

（4）3の文章中の――線部④「それ」とは何のことをさしていますか。よいと思われるものを次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア　クッション
イ　花柄
ウ　小さな窪み
エ　店主

（5）3の文章中に――線部⑤「結局、私は赤色の手袋を買った」とありますが、「身につけるもので赤色などかつて買ったことがない」わたしは、なぜその手袋を買ったのですか。「～から。」に続くように三十字以内で理由を説明しなさい。（句読点と記号も一字と数えます。）

（6）3の文章中の――線部a「セッ」、b「モクセイ」をそれぞれ漢字に直しなさい。

国語

受験番号

（注）（※のついたカッコの中には何も記入しない）

1

（1）

（2）

（3）

（4）

（5）

○ ○

15 15

（6）

（※　　）（※　　）

（※　　）（※　　）

（※　　）（※　　）

2

（1）

（2）

（3）

（4）〈初め〉

7

〈終わり〉

7

（5）

（※　　）（※　　）

3

（1）

（2）

（3）

（4）

（5）

30 15

から。

（6）

a

セッ

する

b

モクセイ